



小児の肺炎球菌ワクチン (プレベナー)

こどもに重い症状をもたらす細菌性髄膜炎という病気があります。この病気は日本全国で毎年1,000人くらいの小児が感染しそのうち約5%が死亡、約20%に重い後遺症が残るといわれています。この細菌性髄膜炎の原因は約6割がHib(インフルエンザ菌b型)、約3割が肺炎球菌です。近年これらの細菌に対するワクチンが開発され世界各国で定期接種されています。そのため先進諸国ではこれらの病気はほとんど見られなくなりました。WHO(世界保健機関)はすべての国で定期接種にすべきと勧告を出しています。

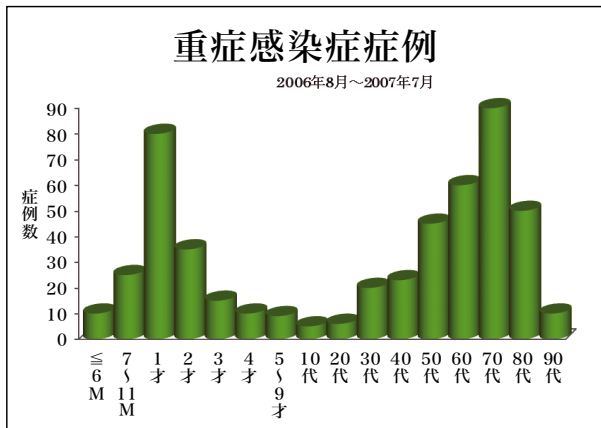
さくらこどもクリニック (☎0267-78-3232) 竹岡 正徳 院長

肺炎球菌とは

こどもの細菌感染症の2大原因の一つ。小さいこども、特に赤ちゃんのうちは、この細菌に対する抵抗力が無いいため細菌性髄膜炎などの重い病気を引き起こしたりします。

かかりやすい年齢は

肺炎球菌の感染症は特にこどもと高齢者が要注意です。特に2歳以下のこどもの場合、重い病気になる症例が多く特に注意が必要です。(図1)



(図1) ※2009日医雑誌より

肺炎球菌が起こす病気

- ①細菌性髄膜炎：脳や脊髄を覆う髄膜に菌が侵入し炎症を起こします。髄膜炎にかかると命を奪われたり重い障害(発達、知能・運動障害、水頭症、難聴等)が残ります。
- ②菌血症：血液の中に菌が入り込む事。放っておくといろいろな臓器に移り髄膜炎など重い病気を引き起こします。

診断、治療

細菌性髄膜炎を起こすような場合でも早期診断は難しく、その後にはけいれんや意識障害が始まります。診断がついても抗菌薬が効かない耐性菌も多く、治療は困難です。Hib髄膜炎に比べて、死亡と後遺症の比率が少し高くなります。

予防・効果

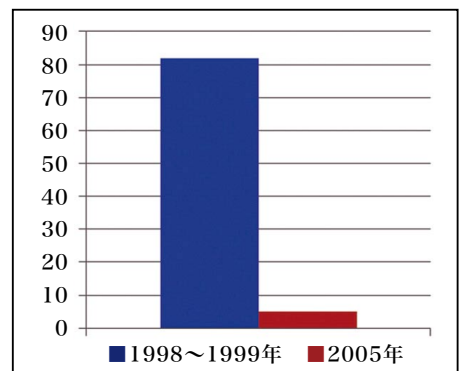
肺炎球菌ワクチン：日本では先進諸国に大幅に遅れ今年2月に承認されました。肺炎球菌ワクチンはこどもの命にかかわる重い病気(髄膜炎、菌血症、重症肺炎)を予防します。

2000年から定期接種をしているアメリカでは肺炎球菌による重い病気が大幅に減りました。定期接種前の1998/1999年より2005年は重い病気の発症数が98%減少しています。(図2)

2007年にWHO(世界保健機関)は、こどもの肺炎球菌ワクチンを世界中で定期接種とするように推奨しています。小さなこどもは肺炎球菌に対して抵抗力を持っていませんが、こども用の肺炎球菌ワクチンを接種することで抵抗力がで、一番この病気にかかりやすい年齢の間、肺炎球菌からお子さんを守ってあげることが出来ます。

接種時期

生後2カ月以上か



(図2) ワクチンで予防できる肺炎球菌による重い病気の発症数(10万人あたり) ※米国CDCデータより

最後に

肺炎球菌ワクチン、ヒブ(Hib)ワクチンともにまだ任意接種であり費用も高額です。いずれは定期接種(公費)となる可能性があります。現実となるのはまだ先のことと思いますが、抵抗力の少ない小さなお子さんを重い病気から守る一つの手段としてご検討されてみてはいかがでしょうか。

*Hib感染症に対するHibワクチンに関しては今回は割愛させていただきます。